我が家のお雛様

我が家のお雛様は亡き母の手作りで、50 年ほど経っています。同居を機に毎年飾っています。

（第一地区２組　森　祥子）

私のおうち時間

第三地区　ペンネーム　禰豆子

その２
子供から勧められ全く興味もなく渋々読み始めた鬼滅に、はまってしまいました。特に鬼になる前の人間であった時の生い立ちが切なく感動でした。

その１
１回目の緊急事態宣言で、マスクがなかなか手に入らなくなった頃手に、チクチク作り始めたら、すっかり作る事が楽しくなりました。

昼休みのデート

第八地区　九組　永瀬　典史

平日の昼下がり、「あぁ、仕方がないわね、今日も付き合ってあげるか……もちろん私の大好きなおやつの準備もあるのよね？ただ最初から歩くのは嫌よ。だって、疲れちゃうじゃない……」と伸びをして、半分嫌々ながらもデートしてくれる、そんな頼もしい存在に救われている。その存在とは……もちろん愛する妻！！という訳はなく、愛犬 みるくのことである。

昨年の春から、新型コロナウイルス感染症の影響で、私も例に漏れず在宅勤務が増え、ストレスと運動不足の解消に努める必要に迫られた。そこで、昼休みの時間に一人で散歩することにしたのだが、何か目標がないと張り合いがない……商店街を歩き、美味しそうな惣菜を探し、昼ごはんに一品足したり、普段は行かない遠くのパン屋まで足を伸ばし、ちょっと贅沢な食パンを買ってみたりして、自分へのご褒美を作ってみた。ところが、気がつけばお腹の脂肪は厚くなるのに、財布は薄くなる、しかも妻からは嫌な顔をされてしまうという、肉体的にも金銭的にも精神的にもマイナスという、貧の三冠王に陥ってしまったのである。

この状況ではまずいと思っていると、ふと昼の散歩に付き合ってくれそうな貴重な存在に気づいたのである。一人で歩くよりはるかに楽しく、忙しい妻の役にもたち、妻もご機嫌、しかもお金もかからない！一石二鳥にも三鳥にもなるじゃん！ということで、みるくとの昼のデートが始まったのである。

ところが、我が愛犬、散歩が嫌いときていて、なかなか素直には付き合ってくれない。しかも、私を見ると「うぅ～」と唸り声をあげるほど、もともと信頼関係もない：さぁどうしよう？？

しかし、一つだけ救いの手が！みるくは自転車の前かごに乗って、風をきるのが大好きなのである。そこで、大きな公園まで自転車に乗せ、散歩することにしたのだが、これが大正解！十二時近くになると、自転車とおやつを目当てに、「よっこらしょ」と起き出してくるようになったのである。

昼休みの限られた時間では遠出はできないので、武蔵国分寺公園まで一直線、自転車を降り、公園内をぐるりと回り、途中のベンチで至福のおやつタイム。お気に入りのサツマイモのおやつを美味しそうに食べたあとは、早く帰ろうと今度は自転車に向かい一直線。定位置の前かごに乗り込み、公園西側消防署横の下り坂で風をきって、史跡公園を抜け、帰宅する。

帰宅後はうとうとしながら、私には見向きもしない……そんな愛犬の姿を横目に、私は午後の仕事でパソコンとにらめっこ。「ああ少しはみるくとの距離が縮まったな」と思って油断していると、お客さまとの電話やリモート会議になるとなぜか急に吠えまくる……その吠える声を聞いて「あっ、永瀬さん、今日も在宅勤務ですね(笑)」とお客さまに勤務状況がばれてしまうのである……はぁ。

一日も早くコロナ禍以前の生活に戻りたいと強く願っているが、通常の生活に戻っても週末くらいはみるくとの昼のデートを続けていきたいなと思う今日この頃である。

余談であるが、このデートコースで武蔵国分寺公園にかかるふれあい橋を渡るのだが、東の方角に小さく東京スカイツリーが見える。綺麗に見えるとそれだけで少し幸せな気持ちになれるから不思議である。

「硫黄島」訪問記(その１)－連載３回－

第二地区１組　椙本　一臣

1.「硫黄島」を訪問した訳

1986 年(昭和61年)頃の古い話で恐縮ですが、二泊三日の行程で、簡単には行くことの出来ない島、[硫黄島]を訪問したことがありました。

何故「硫黄島」へ行くことになったのか。第二次世界大戦の激戦地となった「硫黄島」は、戦後アメリカ軍の統治下となり、1968年(昭和43年)、硫黄島の施政権が日本に返還されたことに伴い、我が国の領土となりましたが、従来から存続していた自衛隊基地及び自衛隊員、通信設備はそのまま据え置かれました。時を同じゅうして小生の勤務先であったNTTが通信衛星を打ち上げたのです。その結果、自衛隊側からNTTの通信衛星をも利用したいとの申し出がありました。となるとNTT側としては「硫黄島」をNTTの収容エリアとして定め、その地域のNTT通信設備について責任をもって対応する義務が生じるのです。このためNTTとしては収容エリアを決定するために、現地調査を行うこととなるのですが、小生は、この収容エリアを決定するチームの一員として「硫黄島」を訪問することとなったのです。

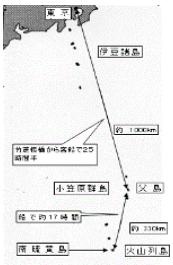
2, 自衛隊輸送機により「硫黄島」を訪問

当時も現在も、「硫黄島」は民間人の訪問、居住は、何人も認められておらず、簡単には行くことの出来ない聖地であり、交通手段もありません。唯一の手立ては自衛隊機だけなのです。

そのため、唯一の交通手段である自衛隊の輸送機を利用することとなり、航空自衛隊入間基地へ集合、勇躍、出発しました。自衛隊に事前に提出した「飛行承諾書」を基に、作製された氏名札が、全員の首元にぶら下がり輝いていましたが、これは、万一に備えそれぞれの識別が可能となるための措置が講じられたものであり、あまり気分の良いものではありませんでした。飛行時間は 3 時間程度だったとおもいます。

輸送機の乗り心地は悪く、機体側面の金枠にネットを張っただけの椅子が有り、これに腰を掛けるのです。機内の爆音は凄く、とても優雅な気持ちには、なれなかったことを記憶しています。機内後部出入口付近には、民間機のスチュワーデス相当に値いする自衛隊服の自衛官一人が見張り役として配置されていましたが、機長の雄姿を見ることは出来ませんでした。

機内は飛行機内部中央に荷物が積まれ、荷物越しの人が、誰であるかは分からない状態ですが、輸送機（C130 機？）ですから、我々も荷物扱いで当然なのでしょう。



椙本一臣さん
当時四十八歳

編集後記

新型コロナの影響で自治会活動がことごとく中止となったことから、会報に載せる記事にこと欠く事態となっております。こんなご時世だからこそ、皆さんが明るい気分で過ごせるように楽しく愉快な記事を沢山載せたいと思います。はまっている趣味の話、珍しい体験談、所属サークルの紹介や仲間募集等、皆さんの投稿をお待ちしております。　すえひさ